

平成26年度第2回（第8回）外部アドバイザー委員会報告書

1 開催場所

倉敷市立短期大学 大会議室

2 開催日時

平成27年3月10日（火） 13:00～14:47

3 出席者

①委員：出席7名（欠席1名）

江島学長（委員長）、高田委員、山本委員、乙部委員（代理：榎本先生）、陶山委員、河合委員、岸本委員（欠席：佐藤委員）

②教職員：出席6名（欠席1名）

野村保育学科長、内田服飾美術学科長、三輪図書館長、安達学生部長、田中学生部主幹、岩崎事務局長、峰尾事務局主幹

③オブザーバー：出席1名

澤田企画経営室室長

4 次第

- (1) 学長挨拶
- (2) 外部アドバイザー委員自己紹介
- (3) 短期大学関係者自己紹介
- (4) 報告・審議事項

5 外部アドバイザー意見

- 意見1：委員として短大の改革について検討した。倉敷市の工業出荷額は4兆5千億で全国3位。全国代表する市であるから財政規模からして出来るはず。商工会議所としても児島駅前の海員学校の跡地を何とかしたい。窓口が県であり、以前は国土交通省管轄であったが現在は財務省が管轄。半分返そうという案も出たが国からストップがかかった。土地活用が短大へ何か見いだせないかと考える。内閣府の事業で先生や学生に協力していただいた。児島は人口や事業所が減少している。児島も定住人口を増やさなければいけない。
- 意見2：倉敷市内に4年制大学は多い。オリジナルなカラーを出しながら、短大であることのメリット、例えば短大であるから進学できる方もいる。短大が次の進学先と繋ぐ道となるのもよいかと考える。ただやはりこの学校でないと学べないということを前面に出すべきである。服飾美術学科は児島だからこそその学科であると思う。前面に押し出すためのものが何かを考えていただきたい。大学もグローバル化の時代だが、日本の文化で勝負するべき。優秀な学校があれば人は集まる。
- 意見3：先ほどのミズーリ大学との提携もある。世界に目を向けることも大事であり、服飾美術学科でのデニム製品を日本独自の、日本のカラーを出せるようなものにアレンジすればよいのでは。日本の学生服も世界で注目を集めるのではないか。

- 意見4：せんい祭りが初めて開催されたのが昭和30年。今年で60年目を迎える。もともとは学生服から始まっている。今年は学生服のイベントの見直しをしたい。学生の意見も聞きたいしぜひ参加していただきたい。青春の輝きをもう一度をキャッチフレーズにPRしていくので、協力をお願いしたい。
- 意見5：「坂の上の（卒業生アンケート調査報告書）」は、学生それぞれ個性が出ているし、学生生活も身近に感じられて非常に良い。前回も入試の話題が出たが、卒業生の就職した姿が明確に伝えられるものがあればよいと伝えた。この冊子はボリューム的にもクオリティもよいもの。予算の関係もあると思うが、今後も作成を考えていくとよいのではないか。これからの5年は今までの5年と違い、不透明。受験環境なども様変わりしていることであろう。しかし、学生が大学で学ぶことにより自分の夢を叶えていく、希望の就職先に行けるとか、また親にしても子どもがやりたいことが大学で本当に出来るのかということに伝えていくことが受験生確保に欠かせないであろう。倉敷市立短大の良さをホームページや高校訪問で発信していただきたい。学外での学生活動も継続していけば就職に繋がるのではないか。学生が主体的に活動したことは就職活動の際、よいPRになると思う。短大生は自由に使える時間も限られると思うが、そのような活動を学校で評価することは出来ないか。非常に忙しいカリキュラムの中での活動になると思うので、就職に結びつくような内容について打ち込んでいる学生にはレポートで認めたりすると学生の活動意欲も高まるのではないか。
- 意見6：保育学科の卒業公演を観ている。とても素晴らしい公演である。可能であれば児島の民話や昔話を取り入れていくとよいのではないか。本の読み聞かせでもよい。地元児島の歴史や文化に小さいころから触れることで地元への愛着や誇りを感じられるのではないか。
- 意見7：4年制への移行について、高校の進路の現場から述べると、公立の大学が4年制になると倍率も上がり進学が厳しくなる。公立の短大であるからこそその理由で、県外の短大まで進学する学生がいる。就職率の高さも倉敷市立短大の魅力である。地元で貢献できる社会人を育てる短大としてもっとPRするとよい。

以上